

■芸術学部造形学科 認定課程:中一種免(美術)、高一種免(美術)、高一種免(工芸)

1)教員養成の目標

芸術を通して現代社会を俯瞰的に見つけ、多様な表現手法と多角的な思考方法を身につけた人材の養成を目的として編成された造形学科の教育課程を履修するなかで、表現の技能はもちろん、自ら考え、自ら表現する美術・工芸における実践を生徒に指導できる教員を育成する。現代社会とより深く関係性を持つための技法や知見の探究を通じて、美術科・工芸科を担当する教員としてより実際的な識見を生徒に教授できる資質を高めるべく、多様な素材や表現様式に精通できるような領域横断的教育プログラムを提供する。修学を通じ、美術教科を担当する教員として求められる専門性・指導力・表現力等を高め、将来教壇に立つ上でのバックグラウンドを強化する。

2)目標達成のための計画

履修年次		目標達成のための段階的計画
年次	時期	
1年次	前期	美術を学ぶ上での基礎となる「体験教育」と多様な技術や表現手段を体験する「メチ教育」、ホームルームでの個性に合わせた少人数指導により、「基礎・体験・道標」を軸に表現することの「おもしろさ」を知り、基礎となる能力を養う。授業においては「絵画」と「彫刻」の表現について基礎的内容を確実に理解する一方で選択履修科目の中で洋画、日本画、立体表現、陶芸、染織、版画、映像の7つの領域から芸術全体を俯瞰するイメージを意識付ける。 また教職を志す学生は初年次から開設している入門的位置づけの教職関連科目を履修することで、「教育」についての理解を深めつつ今後の教職志向について教職課程履修の有無について判断する材料とする。
	後期	基礎的な表現方法を体感する一方で様々な芸術領域を理解することで今後の成長に備える時期となる。具体的には前期の「絵画」と「彫刻」に続き「デザイン」と「工芸」の表現について基礎的な力を養うことにより教職課程における核となる内容について理解を深める。 教職を志す学生は初年次から開設している入門的位置づけの教職関連科目を履修することで理解を深め、今後の教職課程継続について客観的な判断をする時期となる。また介護等体験に備えて「又は科目」についても履修することが望ましい。
2年次	前期	2年次より、洋画、日本画、立体表現、陶芸、染織、版画、映像の7つの領域より自ら選択した専攻の専門教育をさらに進化・実践しながら、技術力、表現力、思考力を深めるとともに創造力と社会への発信力を養い、自身の専門性、造形芸術における方向性を確認することを目的とする。また美術理論等について理解を深め、自由にそして深く考えるための素養をつくる。教員になるにあたって必要な基礎理論に関する知識(教育理念、教育史、教育思想、教育制度、生徒の心身の発達や学習過程など)についてはこの時期までに確実に修得しておく。
	後期	前期に引き続き、表現の基本能力の向上を目指し、課題制作の量をこなすと同時に、技法のバリエーションと表現力を増やし、それらの質を高めていく。教員になるにあたって必要な基礎理論に関する知識(教育理念、教育史、教育思想、教育制度、道徳、生徒・児童の心身の発達や学習過程など)について復習しつつ、教育課程の意義やその編成方法に関する理解、教育方法の考察や教材活用に必要な技術の修得に努め、各自で各教科で学んだ事項について体系・統合化する。
3年次	前期	所属するコースの専門領域をさらに探求しながら、アートプロジェクト等に関わり、社会と創造的で双方向的な関係を切り結んでいくことを模索する時期である。一つの専攻内の教員だけでなく、多領域にわたる専門性と経験を有する実技および理論の教員らによる指導や対話を通じて、芸術のあり方、考え方の多様な可能性を学んでいく。教職志望者としては、教職の意義や教員が担う役割について再確認するとともに教員の具体的な職務内容について知ることで教職に就くことに対するリアリティを高めつつ、美術科等の各種指導法を学び教育実践力を養成する。
	後期	前期に引き続き、所属する専攻の専門教育を実践しながら対外的に発信をすることにより、自身の専門性や造形芸術における方向性を確認していくことを目的とする。 教職課程履修者については次年度、実際に教壇に立った自分を創造しながら、模擬体験や事例研究、教材試用、指導案作成など授業のなかで美術科教育の手法について習熟の度合いを深めていくとともに、これまでに学んだ教育に関する理論と方法を復習し、教員としての資質能力を総合的に向上させる。またクラス運営に備えて道徳教育についても理解を深める必要がある。
4年次	前期	学生が自ら必要とする技術や指針を多くの選択肢の中から選びとる力、客観的かつ柔軟に対象を捉える基礎力に加え、領域横断的な表現への対応力、自由にそして深く考えるために必要な知識、思考力などをじっくりと学べる環境を整備する。 教職課程においても学習の成果を検証する総括の時期である教育実習に赴く。事前指導でモチベーションと実践力を高めて実習に臨み、学校現場で生徒たちと交わる実体験を通して教職の醍醐味を実感する。数週間の実習期間の中で、教員として自分には何が出来て何が出来ないのかを認識し、足りない部分は克服すべき課題として持ち帰り、後期の学習につなげる。
	後期	4年間の制作と研究の集大成としての卒業制作に開花させていきながら、自身を社会へ、進学へと繋げていく。 教職課程においては事後指導と教職実践演習の授業が控える総決算の時期であり、教員として足りない知識や技術をこの半期の間にブラッシュアップし、これまで学科の実技や講義等で培った専門的な技能と見識をいかに有機的に美術教育へ繋げるか各自で思慮し、様々な領域アプローチから芸術実践を生徒に指導できる自分なりの方法論を確立する。

■ デザイン学部イラスト学科 認定課程: 中一種免(美術)、高一種免(美術)

1) 教員養成の目標

「伝える能力」の育成を教育方針の大きな柱のひとつとして掲げている学科の専門教育と連動させながら、絵画よりもポピュラーなものへと変容し、生活全般に溶け込んで万人に膾炙しているイラストという汎用性の高い表現形式を教育素材として最大限に活用し、美術教育・振興のレバレッジに使うことのできる、イラストの機能に知悉した現代的な美術教員の養成を目指す。

2) 目標達成のための計画

履修年次		目標達成のための段階的計画
年次	時期	
1年次	前期	まずは前期中のなるべく早い段階で大学という高等教育システム(教育課程の成り立ちと履修制度の仕組み)に馴れることを最低条件とする。「あらゆる表現行為の前にイメージがある」という大前提を認識するとともに、「イメージは手の延長にある」という考えから「描く」というエクササイズを徹底的におこない、様々な表現の基礎となる力を養うというイラスト学科の教育方針を体感する。また、メディアの時代に対応する不可欠な能力としての英語力の向上を目指す。教職を志す学生は初年次から開設している入門的位置づけの教職関連科目を履修することで、教職志向を強めるか教職課程の履修を断念するかを判断する。
	後期	各種メディアを自由に横断する当学科の表現領域の可能性に気づき、他のファインアート専攻との学びの相違を強く認識する。表現する上でもっとも重要な時代感覚を養うことを目的に、日常的にも知覚興味の幅を広げ、多種多様な芸術作品や出版媒体に目を向け、イメージを育むトレーニングをおこなう習慣を身につける。また、メディアの時代に対応する不可欠な能力としての英語力の向上を目指す。教職を志す学生は初年次から開設している入門的位置づけの教職関連科目を履修することで、教職志向を強めるか教職課程の履修を断念するかを判断する。
2年次	前期	1年次に引き続き、表現の基本能力となる描画力の向上を目指し、課題制作の量をこなすと同時に、技法のバリエーションを増やし、それらの質を高めていく。また、メディアの時代に対応する不可欠な能力としての CG スキルの上達を図る。教職課程履修に関する覚悟を固める課程登録手続きが発生する年次であり、教員になるにあたって必要な基礎理論に関する知識(教育理念、教育史、教育思想、教育制度、生徒の心身の発達や学習過程など)についてはこの時期に確実に習得しておく。
	後期	前期に引き続き、表現の基本能力となる描画力の向上を目指し、課題制作の量をこなすと同時に、技法のバリエーションを増やし、それらの質を高めていく。また、メディアの時代に対応する不可欠な能力としての CG スキルの上達を図る。教員になるにあたって必要な基礎理論に関する知識(教育理念、教育史、教育思想、教育制度、道徳、生徒・児童の心身の発達や学習過程など)について復習しつつ、教育課程の意義やその編成方法に関する理解、教育方法の考察や教材活用に必要な技術の習得などに努め、各自で各教科で学んだ事項について体系・統合化する。
3年次	前期	様々な表現様式と視覚メディアを並列に学び、多数の制作課題を通して試行錯誤を繰り返しながら、一人ひとりが独自の表現スタイルを模索する。授業という名のプログラムこそ用意はしているが、先人の模倣から逃れ、学生各人が自立/自律した表現者となる自覚を持ち、互いに創造性を競い合う環境下で大いに制作上の悩みを抱えることそれ自体を目標とする。教職志望者としては、教職の意義や教員が担う役割について再確認するとともに教員の具体的な職務内容について知ることによって教職に就くことに対するリアリティを高めつつ、美術科の指導法を学び教育実践力を養成する。
	後期	前期に引き続き、様々な表現様式と視覚メディアを並列に学び、多数の制作課題を通して一人ひとりが独自の表現スタイルを確立させる、もしくは方向性を見出す。次年度、実際に教壇に立った自分を想像しながら、模擬体験や事例研究、教材試用、指導案作成などのブラクティカルな授業のなかで美術科教育の手法について習熟の度合いを深めていくとともに、生徒指導・進路指導・教育相談に関する理論と方法を学び、教員としての資質能力を総合的に向上させる。
4年次	前期	WEB 上でギャラリーを立ち上げたり、アートイベントを企画したりするなど、表現者としていかに世の中にプレゼンテーションをおこなうか、作品自体だけではなくプロモーションも含めた各人のアウトカム全体が問われる。学内外の学生同士や企業、あるいは海外の団体などと連携して共同企画・制作をおこなうような、第三者とのコラボレーションの過程のなかで、実社会で汎通的に求められるコミュニケーション能力を高い水準まで引き上げる。教職課程においても学習の成果を検証する総括の時期、すなわち教育実習に赴くことになる。事前指導でモチベーションと実践力を高めて実習に臨み、学校現場で生徒たちと交わる実体験を通して、楽しさも難しさもひっくるめた教職の醍醐味を実感する。数週間の実習期間の中で、教員として自分には何が出来て何が出来ないのかを認識し、足りない部分は克服すべき課題として持ち帰り、後期の学習につなげる。
	後期	拡張し続ける視覚メディアすべてをステージとして各領域を自由に横断する卒業制作に従事するなかで、クリエイターとしての自覚と自信を持てるようになる。イラスト学科の大きな教育目標である「メディアとアートの統合」を学科教員や学内関係者、一般鑑賞者に感じさせてくれるような力作が卒業制作展に並ぶことを期待する。教職課程においては事後指導と教職実践演習の授業が控える総決算の時期。教員として足りない知識や技術をこの半期の間にブラッシュアップし、これまで学科の実技や講義等で培ったデザイン分野における専門的な技能と見識をいかに有機的に美術教育へリンクさせるかを各自で思案し、他分野出身者とは異なるコミュニケーション・デザイン的なアプローチから芸術実践を生徒に指導できる自分なりの方法論を確立する。

■ デザイン学部ビジュアルデザイン学科 認定課程: 中一種免(美術)、高一種免(美術)

1) 教員養成の目標

あらゆるメディアや表現様式に精通するための教育プログラムの修学を通じ、現代社会とアクチュアルに切り結ぶための技法や知見の探究を通じて、ファインアートの分野での教育研究を経た教員とは異なるコミュニケーション・デザイン的なアプローチから、より実際の知識や芸術実践を生徒に指導できる美術教員の養成を目指す。

2) 目標達成のための計画

履修年次		目標達成のための段階的計画
年次	時期	
1年次	前期	まずは前期中のなるべく早い段階で大学という高等教育システム(教育課程の成り立ちと履修制度の仕組み)に馴れることを最低条件とする。コンピュータの実習により基礎的なデジタルスキルを身につけるとともに、グラフィックデザインの重要な表現要素である「文字」と「図像」の実習を軸に両者を関係づけながらビジュアルデザインの基礎的技法を習得する。また、メディアの時代に対応する不可欠な能力としての英語力の向上を目指す。教職を志す学生は初年次から開設している入門的位置づけの教職関連科目を履修することで、教職志向を強めるか教職課程の履修を断念するかを判断する。
	後期	前期に引き続き、グラフィックデザインの重要な表現要素である「文字」と「図像」の実習に取り組み、両者の関係性に対する理解を深め、表現者の基礎体力を上げる。絵画的技能についても課題制作を通じてその基本的な能力を高める。課題テーマに対して、自らの構想やイメージを自在に発展させながら手わざや感性を磨く。また、メディアの時代に対応する不可欠な能力としての英語力の向上を目指す。教職を志す学生は初年次から開設している入門的位置づけの教職関連科目を履修することで、教職志向を強めるか教職課程の履修を断念するかを判断する。
2年次	前期	1年次で学んだ「文字」と「図像」の要素を発展させた「文字設計」と「図像デザイン」に関するより専門的な技能を習得する。併せて、写真や WEB デザインなどの映像メディア要素を含む主題について知識や技能の獲得に努める。教職課程履修に関する覚悟を固める課程登録手続きが発生する年次であり、教員になるにあたって必要な基礎理論に関する知識(教育理念、教育史、教育思想、教育制度、生徒の心身の発達や学習過程など)についてはこの時期に確実に習得しておく。
	後期	前期に引き続き、多岐にわたる芸術表現を学び、各表現領域における個々の能力レベルや相性について自覚する。各自が指向する分野の能力を伸長させるとともに、苦手分野の能力の引き上げを図る。教員になるにあたって必要な基礎理論に関する知識(教育理念、教育史、教育思想、教育制度、道徳、生徒・児童の心身の発達や学習過程など)について復習しつつ、教育課程の意義やその編成方法に関する理解、教育方法の考察や教材活用に必要な技術の習得などに努め、各自で各教科で学んだ事項について体系・統合化する。
3年次	前期	2年次に個々が磨いたスキルをいかにして作品制作に最大限活かすかを模索するプロジェクト型の実習授業により、応用力を高める。また、デザインという専門の蛸壺に籠らず、美術の理論や歴史についても造詣を深めるように努め、作品の批評力やコンテキストを読み解く力を養う。教職志望者としては、教職の意義や教員が担う役割について再確認するとともに教員の具体的な職務内容について知ることで教職に就くことに対するリアリティを高めつつ、美術科の指導法を学び教育実践力を養成する。
	後期	前期に引き続き、具体的かつ実践的ないくつかのプロジェクト型の実習授業を通して、表現者として、そして将来の学校教員として不足している専門知識と技能に気づき、各自でそれらの要素を補完する。翌年度の卒業制作に向けて、一人ひとりが独自の表現スタイルと方向性を見出す。また、次年度、実際に教壇に立った自分を想像しながら、模擬体験や事例研究、教材試用、指導案作成などのプラクティカルな授業のなかで美術科教育の手法について習熟の度合いを深めていくとともに、生徒指導・進路指導・教育相談に関する理論と方法を学び、教員としての資質能力を総合的に向上させる。
4年次	前期	4年間の集積として、それまで研究を積み重ねてきたデザインを「テーマ研究」として総括・作品発表する。教職課程においても学習の成果を検証する総括の時期、すなわち教育実習に赴くことになる。事前指導でモチベーションと実践力を高めて実習に臨み、学校現場で生徒たちと交わる実体験を通して、楽しさも難しさもひっそりめた教職の醍醐味を実感する。数週間の実習期間の中で、教員として自分には何が出来て何が出来ないのかを認識し、足りない部分は克服すべき課題として持ち帰り、後期の学習につなげる。
	後期	卒業制作プロジェクトと教育実習事後指導、教職実践演習の授業に真剣に取り組むなかで、4年間の総決算として各自が自覚した教員として足りない知識や技術をこの半期の間にブラッシュアップする。これまで学科の実技や講義等で培ったデザイン分野における専門的な技能と見識をいかに有機的に美術教育へリンクさせるかを各自で思案し、他分野出身者とは異なるコミュニケーション・デザイン的なアプローチから芸術実践を生徒に指導できる自分なりの方法論を確立する。

■ デザイン学部プロダクトデザイン学科 認定課程: 中一種免(美術)、高一種免(美術)、高一種免(工芸)

1) 教員養成の目標

感性豊かな発想をカタチにする表現スキル、モバイル電子機器等の新たな価値を生み出すプロデュース力、心躍る生活用品や空間演出等を創出できる力を育成するとともに、京都の伝統産業工芸の歴史と技能に触れて職人の姿勢を後世へ継承するためのプロダクトデザイナーを養成する学科の専門教育課程との密な連関性によって、総合力の高い美術科教員の養成を目指す。

2) 目標達成のための計画

履修年次		目標達成のための段階的計画
年次	時期	
1年次	前期	まずは前期中のなるべく早い段階で大学という高等教育システム(教育課程の成り立ちと履修制度の仕組み)に馴れることを最低条件とする。立体・平面の造形とデザインのためのハンドスキルの基礎技術を習得する。美しい形態を追求するために自由に発想・ものづくりをおこない、身内の創造力を引き出し、独自の色彩や形態を生み出し、それを他者に適切に伝える表現力を磨く。また、メディアの時代に対応する不可欠な能力としての英語力の向上を目指す。教職を志す学生は初年次から開設している入門的位置づけの教職関連科目を履修することで、教職志向を強めるか教職課程の履修を断念するかを判断する。
	後期	京都という立地を活かした「工芸」(竹、漆、鍛金、京指物等)を含む演習授業により、京都ならではの DNA が生み出すデザイン感覚を吸収する。かたちと色、絵画、立体構成、製図、CG などのデザインに必要な要素やスキルの基礎を習得する。基礎教職を志す学生は初年次から開設している入門的位置づけの教職関連科目を履修することで、教職志向を強めるか教職課程の履修を断念するかを判断する。
2年次	前期	1年次の学習内容を基盤とし、一部の基礎デザインと専門性に準じた応用デザインのノウハウを習得する。素材、レンダリング、CAD、模型制作などのほか、京都の地産プロダクトにも触れ、多角的かつ密度の高いプログラムから、専門的な知識と技能を広範に身につける。教職課程履修に関する覚悟を固める課程登録手続きが発生する年次であり、教員になるにあたって必要な基礎理論に関する知識(教育理念、教育史、教育思想、教育制度、生徒の心身の発達や学習過程など)についてはこの時期に確実に習得しておく。
	後期	前期に引き続き、多様なデザイン手法に触れ、制作上重要なデザインコンセプトの意味や発想方法、初歩的なデザインプロセスの習熟に加えて、デザイン分野からみた情報メディアや自然科学との関わりなどについて実習を通じて学び取る。教員になるにあたって必要な基礎理論に関する知識(教育理念、教育史、教育思想、教育制度、道徳、生徒・児童の心身の発達や学習過程など)について復習しつつ、教育課程の意義やその編成方法に関する理解、教育方法の考察や教材活用に必要な技術の習得などに努め、各自、各教科で学んだ事項について体系・統合化する。
3年次	前期	各自がテーマとして取り上げたいデザイン領域を専門的かつ広い見地から調査・分析し、それに基づいてデザインワーク全体の要領に慣れることを3年次の目標のひとつとする。基礎から発展して、インダストリアルデザインやエルゴノミクスデザイン、インテリアデザインなどに接し、美しい遊び心や感性に磨きをかける。教職志望者としては、教職の意義や教員が担う役割について再確認するとともに教員の具体的な職務内容について知ることで教職に就くことに対するリアリティを高めつつ、美術科の指導法を学び教育実践力を養成する。
	後期	前期に引き続き、各自がテーマとして取り上げたいデザイン領域を専門的かつ広い見地から調査・分析し、それに基づいてデザインワーク全体の要領に慣れることを目標とする。環境デザイン、エディトリアルデザインなどだけでなく、デザインマネジメントなどに接し、美的感覚の練磨と社会的見識の獲得を目指す。次年度、実際に教壇に立った自分を想像しながら、模擬体験や事例研究、教材試用、指導案作成などのプラクティカルな授業のなかで美術科教育の手法について習熟の度合いを深めていくとともに、生徒指導・進路指導・教育相談に関する理論と方法を学び、教員としての資質能力を総合的に向上させる。
4年次	前期	各自テーマとするデザインの専門性に基づき、学びの集大成として、調査・研究・分析をおこない、自ら築き上げたコンセプトに裏づけされたデザインワークを展開させる。自身の作品が有する社会的メッセージ性やプロダクトとしての魅力について客観的に批評できる力を備えたい。教職課程においても学習の成果を検証する総括の時期、すなわち教育実習に赴くことになる。事前指導でモチベーションと実践力を高めて実習に臨み、学校現場で生徒たちと交わる実体験を通して、楽しさも難しさもひっくり返した教職の醍醐味を実感する。数週間の実習期間の中で、教員として自分には何が出来る何が出来ないのかを認識し、足りない部分は克服すべき課題として持ち帰り、後期の学習につなげる。
	後期	教職課程においては事後指導と教職実践演習の授業が控える総決算の時期。教員として足りない知識や技術をこの半期間にブラッシュアップし、これまで学科の実技や講義等で培ったデザイン分野における専門的な技能と見識をいかに有機的に美術教育へリンクさせるかを各自で史料し、他分野出身者とは異なるコミュニケーション・デザイン的なアプローチから芸術実践を生徒に指導できる自分なりの方法論を確立する。デザインを発想する力を向上させるために、これまで履修してこなかったデザイン領域以外の一般教養科目があれば、在学のうちに主体的に補完履修し、見識を広げるよう努める。

■マンガ学部マンガ学科 認定課程: 中一種免(美術)、高一種免(美術)

1) 教員養成の目標

日本のマンガ文化がグローバルな関心と学習意欲の対象になっている現在、それに応え得る識見を持った人材の育成をわが国の文化的指導力の長期的継続を左右する要諦と捉え、マンガを教育研究の対象として正対し、マンガ文化の継承と発展に貢献できるような、初等教育から高等教育への長期的な構想の上に立った新しい芸術教育を担う人材の養成を目指す。

2) 目標達成のための計画

履修年次		目標達成のための段階的計画
年次	時期	
1年次	前期	まずは前期中のなるべく早い段階で大学という高等教育システム(教育課程の成り立ちと履修制度の仕組み)に馴れることを最低条件とする。観察力と画力の鍛錬を目的として、人物や動物、静物、見慣れた風景などを対象に、徹底的にデッサン、クロッキーによるトレーニングを繰り返す。教職を志す学生は初年次から開設している入門的位置づけの教職関連科目を履修することで、教職志向を強めるか教職課程の履修を断念するかを判断する(必修実技科目の時間割がタイトであること、課題量が多いことを体感したうえで判断する)。
	後期	絵画的要素、デザインの要素のマンガ表現への活かし方を習得する。また、PCを使った演習によって映像メディアの編集やデジタル機器の取り扱い方法に関する基礎知識を得る。美術史・美術理論の背景を参照しながら、マンガの理論や歴史についても理解を深める。教職を志す学生は初年次から開設している入門的位置づけの教職関連科目を履修することで、教職志向を強めるか教職課程の履修を断念するかを判断する(必修実技科目の時間割がタイトであること、課題量が多いことを体感したうえで判断する)。
2年次	前期	1年次と同様に、表現者としての画力の向上・維持を目的に、徹底的に対象の描写トレーニングをおこなうとともに、各自の専門に応じた基礎となる知識と技能の習熟を図る。その演習の過程の中で、物事を多角的に分析する眼力や、ペン・水彩・油彩など、様々な表現を試みながら独自の絵画スタイルを模索する時期とする。教職課程履修に関する覚悟を固める課程登録手続きが発生する年次であり、教員になるにあたって必要な基礎理論に関する知識(教育理念、教育史、教育思想、教育制度、生徒の心身の発達や学習過程など)についてはこの時期に確実に習得しておく。
	後期	アナログ画・デジタル画ともに多数の作品を仕上げ、描画技術を腕に染み込ませる。とりわけ時代の要請ともいえるデジタル化に対応できるよう成果物を作り上げる経験を積み、合評等の機会に他者と比較することで、自分の表現力にはどのような要素が不足しているかを自覚する。教員になるにあたって必要な基礎理論に関する知識(教育理念、教育史、教育思想、教育制度、道徳、生徒・児童の心身の発達や学習過程など)について復習しつつ、教育課程の意義やその編成方法に関する理解、教育方法の考察や教材活用に必要な技術の習得などに努め、各教科で学んだ事項について体系・統合化する。
3年次	前期	2年間にわたりしっかり身につけた基礎技能をもとに応用への展開力を身につける、作品制作のテーマに設定される社会の時事問題等について制作過程の中で教員や同僚とディスカッションを交わしながら、自分なりの価値観や世界観を発見する。教職志望者としては、教職の意義や教員が担う役割について再確認するとともに教員の具体的な職務内容について知ることで教職に就くことに対するリアリティを高めつつ、美術科の指導法を学び教育実践力を養成する。
	後期	現代社会の多くの諸問題を冷静に見つめ、自分の思いを込めた作品を制作できるよう、それを下支える画力の向上と一般教養の深化に各自努める。マンガ領域以外の芸術表現や学問に積極的に触れておきたい。次年度、実際に教壇に立った自分を想像しながら、模擬体験や事例研究、教材試用、指導案作成などのプラクティカルな授業のなかで美術科教育の手法について習熟の度合いを深めていくとともに、生徒指導・進路指導・教育相談に関する理論と方法を学び、教員としての資質能力を総合的に向上させる。
4年次	前期	マンガが「情報操作と表現力を併せ持ったパワフルなメディア」であることを再認識し、学校教育ひいては社会のあらゆる局面への応用可能性について模索する。芸術や娯楽としてのマンガ表現ではない、「マンガの実用性」について認識する。教職課程においても学習の成果を検証する総括の時期、すなわち教育実習に赴くことになる。事前指導でモチベーションと実践力を高めて実習に臨み、学校現場で生徒たちと交わる実体験を通して、楽しさも難しさもひっくるめた教職の醍醐味を実感する。教週間の実習期間の中で、教員として自分には何が出来て何が出来ないのかを認識し、足りない部分は克服すべき課題として持ち帰り、後期の学習につなげる。
	後期	これまで地道に練成してきた画力と表現様式を駆使して卒業制作に取り組む。教職課程においては事後指導と教職実践演習の授業が控える総決算の時期。教員として足りない知識や技術をこの半期の間に強化し、これまで学科の実技や講義等で培った専門的な技能と見識をいかに有機的に美術教育へリンクさせるかを各自で思案し、マンガというメディアを通じて生徒たちにどのような芸術実践を指導し、美術への理解を図れるか、自分なりの方法論を確立する。学校教育におけるマンガ表現のポテンシャルに気づきを得て、教職へのモチベーションを高めたい。

■マンガ学部アニメーション学科 認定課程:中一種免(美術)、高一種免(美術)

1) 教員養成の目標

絵画に要求される力・感性に加え、音楽との協働性、動きと物語性という時間感覚の駆使、視覚の認知科学的知見、物語創作のための歴史的・社会的・文学的知識という多面性や総合性をも求められるアニメーションという表現領域について、表層的な消費文化の一端だけではなく、将来にわたって真の「文化」として発展させていくための担い手として、教職課程を通じたアニメーション芸術の教育・普及者の養成を目指す。

2) 目標達成のための計画

履修年次		目標達成のための段階的計画
年次	時期	
1年次	前期	まずは前期中のなるべく早い段階で大学という高等教育システム(教育課程の成り立ちと履修制度の仕組み)に馴れることを最低条件とする。入門的な専門講義や実技を通して、芸術分野におけるアニメーションという映像芸術の立ち位置について知る。教職を志す学生は初年次から開設している入門的位置づけの教職関連科目を履修することで、教職志向を強めるか教職課程の履修を断念するかを判断する。
	後期	「アニメーションとは何か」を基本の構造から分析し、ドローイング等の授業で探求的な反復鍛錬を通して、真の意味での画力と構想力を身につけることを目指す。理論・作画・CGを三位一体的に学んでいくことで創作者としての基礎体力を養いたい。教職を志す学生は初年次から開設している入門的位置づけの教職関連科目を履修することで、教職志向を強めるか教職課程の履修を断念するかを判断する。
2年次	前期	アニメーションという関数には、変数として「空間」だけでなく「時間」が加わるが、その結果としての「動き」と「物語性」について焦点を当てる。アニメーションを映像技法の表現としてだけ考えるのではなく、広く「動きの文化」として捉え、「動き」の意味性を研究することで、「動き」が持つ表現力の深さの理解を目指す。教職課程履修に関する覚悟を固める課程登録手続きが発生する年次であり、教員になるにあたって必要な基礎理論に関する知識(教育理念、教育史、教育思想、教育制度、生徒の心身の発達や学習過程など)についてはこの時期に確実に習得しておく。
	後期	多様な講義や実習を通じてアニメーションの視野を広げることで、創造者・研究者、そして将来の教育者としての思考に広さと深さと柔軟性を加えたい。アニメーションの技法を支える絵画表現では、基本造形からデフォルメへ、CGでは基本テクニックの習得から自己の表現の探求へと、跳躍を可能にする応用力を身につける。教員になるにあたって必要な基礎理論に関する知識(教育理念、教育史、教育思想、教育制度、道徳、生徒・児童の心身の発達や学習過程など)について復習しつつ、教育課程の意義やその編成方法に関する理解、教育方法の考察や教材活用に必要な技術の習得などに努め、各教科で学んだ事項について体系・統合化する。
3年次	前期	これまでの2年間の学習を基に自分の適性を見極め、作成作品の方向性を定めて、身につけた基礎体力と応用力を駆使して創作技能に磨きをかけ、企画・発想の視野を広げる。教職志望者としては、教職の意義や教員が担う役割について再確認するとともに教員の具体的な職務内容について知ることで教職に就くことに対するリアリティを高めつつ、美術科の指導法を学び教育実践力を養成する。
	後期	デジタルテクノロジーの進化が拓いた新たな地平、すなわちセル、クレイ、人形、切紙、ペーパー、ガラスペインティング、実写などの多様な表現分野が対等の実現可能性を獲得した地平に立って、アニメーションの可能性を問い直すことができる専門知識と技能レベルを学科専門教育科目の履修によって獲得する。次年度、実際に教壇に立った自分を想像しながら、模擬体験や事例研究、教材試用、指導案作成などのプラクティカルな授業のなかで美術科教育の手法について習熟の度合いを深めていくとともに、生徒指導・進路指導・教育相談に関する理論と方法を学び、教員としての資質能力を総合的に向上させる。
4年次	前期	最終年次では卒業制作と発表に向けて、プリプロダクション、プロダクション、ポストプロダクションを完遂させる。これまで練り上げた画力・構想力・表現力・考察力・デザインセンス・他者との協調性・独創性等の要素を総動員して最終課題に立ち向かう。教職課程においても学習の成果を検証する総括の時期、すなわち教育実習に赴くことになる。事前指導でモチベーションと実践力を高めて実習に臨み、学校現場で生徒たちと交わる実体験を通して、楽しさも難しさもひっくり返した教職の醍醐味を実感する。数週間の実習期間の中で、教員として自分には何が出来て何が出来ないのかを認識し、足りない部分は克服すべき課題として持ち帰り、後期の学習につなげる。
	後期	教職課程においては事後指導と教職実践演習の授業が控える総決算の時期。教員として足りない知識や技術をこの半期の間に強化し、これまで学科の実技や講義等で培った専門的な技能と見識をいかに有機的に美術教育へリンクさせるかを各自で思料し、独創的なアプローチから芸術実践を生徒に指導できる自分なりの方法論を確立する。 創成系映像芸術としてのアニメーションの、広大で肥沃な領野が眼前に広がり始めた今、表現ジャンルはなんであろうとも、来るべき時代の芸術性を追究して、学校教育において生徒たちにアニメーションという映像メディアの素晴らしさを伝道できる教員となれるよう、自覚的に学修に臨みたい。

■国際文化学部人文学科 認定課程:中・高一種免(国語)、中一種免(社会)、高一種免(地歴)、高一種免(公民)

1) 教員養成の目標

日本の「文学」「歴史」「社会」「文化」を研究対象とし、日本を基点とした世界の文化と社会を多角的に捉えることを軸としている。多くの課題を抱える教育現場において、その状況を4つの専攻で身につけた広い視野で捉えて解決の方法を探る「発想力」を持ち、解決に向けての働きかけを実践できる「行動力」を持つ教師の育成、そしてチーム学校としての教員組織や保護者、広くは地域社会とともに取り組むことのできる「協働力」を備えた教員養成を目的とする。

2) 目標達成のための計画

履修年次		目標達成のための段階的計画
年次	時期	
1年次	1・2クォーター	「課程」や「履修制度」の仕組みを知り、大学生活の基礎を学ぶ。学生は初年次から開設している入門的位置づけの教職関連科目を履修することで、「教育」についての理解を深めつつ、今後の教職課程履修の有無について判断する材料とする。 教職関連科目を通じて視野を拡張し、今後の学びの可能性を広げ、自らの学習計画の向上と改善を目指す。
	3・4クォーター	入門的位置づけの教職関連科目、66条の6に該当する科目を履修し、1年次での取得を目指す。 引き続き入門的位置づけの教職関連科目を履修することで理解を深め、今後の教職課程継続について客観的な判断をする時期となる。
2年次	1・2クォーター	教職課程履修に関する覚悟を固める課程登録手続きが発生する年次となる。そのため学科と教職課程の両立に向けての履修計画を立案する。一方で教職の基礎的理解に関する科目取得に本格的に取り組む。 教科に関する科目の基礎的な理解を深めながら、前クォーターから引き続き教職課程に関連する科目の単位取得を目指す。
	3・4クォーター	2年次後半の教職の基礎的理解に関する科目を履修し、教員になるための理解を深めつつ、教科に関する科目も集中的に取得する時期となる。 前クォーターに引き続き、教職課程の科目について学び、一方で卒業論文のテーマとも関連する3年次の「長期フィールドワーク」の計画を立案する時期となるが教職に関するテーマについては教職教員にも相談する。
3年次	1・2クォーター	1クォーター全期間を費やす「長期フィールドワーク」にて学外での研究が始まる。参与観察、インタビューやアンケート、現地でのみ入手可能な資料や情報の収集といった調査を実行する。その中で自立した人間としての成長も目指す。 「長期フィールドワーク」の履修により自らの専門的な学びに重層的な厚みを加えた後に、教員の指導のもとで調査報告書をまとめる。その中で新たに得られた知見や教員の指摘に応えることで、更に専門知を高める。
	3・4クォーター	3年次後半にて教職の基礎的理解に関する科目の主要な部分の単位取得を目標とする。学科においてはフィールドワークの調査・研究に関する報告書を作成、展示発表することにより、自らの学びの成果を他者へ伝達するための技能を習得する。 模擬体験や事例研究、教材試用、指導案作成などのプラクティカルな授業のなかで各教科教育の手法について習熟の度合いを深めていくとともに、これまでに学んだ教育に関する理論と方法を復習し、教員としての資質能力を総合的に向上させる。 実際に教壇に立った自分を創造しながら、模擬体験や事例研究、教材試用、指導案作成などの実践的な学びの中で教育実習に必要な能力を向上させる。
4年次	1・2クォーター	教育実習に関する事前指導、実習中の指導、事後指導により教員としての資質向上を目指す。 教職課程においてすなわち教育実習に赴く時期であり、事前指導にて今までの学習の成果を検証、総括する。 学校現場で生徒たちと交わる実体験を通して、楽しさも難しさも含めた教職の醍醐味を実感する。数週間の実習期間の中で、教員として自分には何が出来て何が出来ないのかを認識し、足りない部分は克服すべき課題として持ち帰り、後半の学習につなげる。
	3・4クォーター	教育実習で得られた教師としての課題を克服するため、事後指導、教職実践演習にて弱点を克服する。 第3クォーターに引き続き、事後指導と教職実践演習による総決算の時期。教員として足りない知識や技術をブラッシュアップし、授業で培った専門的な技能と見識をいかに国語の教育へリンクさせるかを各自で思案し、4年間で獲得した実践知を生徒に指導できる自らの方法論を確立する。

■国際文化学部グローバルスタディーズ学科 認定課程:中一種免(社会)、高一種免(公民)

1)教員養成の目標

著しい発展と同時に多様な課題を抱え、世界が注目するアフリカ・アジア地域に学びの場を重点化し、世界の新しい関係性や構造をグローバル視点で捉えることを軸としている。グローバル化の進展とともに大変革期を迎えるアフリカ・アジアの文化や歴史、政治経済を多角的にとらえるなかで得た豊かな「発想力」を育て、必修科目となるフィールドワークにて自発的な「行動力」を培い、身につけた語学やコミュニケーションスキルを「協働力」として発揮できる教員養成を目的とする。

2)目標達成のための計画

履修年次		目標達成のための段階的計画
年次	時期	
1年次	1・2クォーター	「課程」や「履修制度」の仕組みを知り、大学生活の基礎を学ぶ。66条の6に該当する科目を履修する。アジア諸国で約2週間の短期留学に参加する「短期海外ショートプログラム」に東南アジアの社会と芸能文化の体験や、ボランティア活動など興味のあるテーマを選択して参加する。異文化に直に触れ、3年次の長期フィールドワークのための土台となる基礎力を養う。
	3・4クォーター	入門的位置づけの教職関連科目を履修することで理解を深め、今後の教職課程継続について客観的な判断をする時期となる。
2年次	1・2クォーター	教職課程履修に関する覚悟を固める課程登録手続きが発生する年次となる。そのため学科と教職課程の両立に向けての履修計画を立案する。一方で教職の基礎的理解に関する科目、教科の指導法に関する科目の取得に本格的に取り組む。 教科に関する科目の基礎的な理解を深めながら、前クォーターから引き続き教職課程に関連する科目の単位取得を目指す。また教科に関する科目の単位取得にも集中的に取り組む時期となる。
	3・4クォーター	2年次後半の教職の基礎的理解に関する科目及び教科の指導法に関する科目を履修し、教員になるための理解を深める。 前クォーターに引き続き、教職課程の科目について学び、一方で卒業論文のテーマとも関連する3年次の「長期フィールドワーク」の計画を立案する時期となる教職に関するテーマについては教職教員にも相談する。
3年次	1・2クォーター	1～2クォーターにまたがる海外でのフィールドワークが始まる。異文化の社会について、生態環境、社会、文化、政治、経済、歴史など、複眼的に捉え、異文化に身を置くフィールドワークを通じて、対象とする社会を総合的に理解する能力向上を図り教員としての素養を磨く。 学際的な分野として異なる分野の方法や考え方の総合的な利用、フィールドワークの調査方法を学び地域研究を行うための素地を養う。これら経験により教員を目指す自立した人間としての成長を期待する。
	3・4クォーター	教職の基礎的理解に関する科目の主要な部分の単位取得を目標とする。学科においてはフィールドワークの調査・研究に関する報告書を作成、展示発表することにより、学びの成果を他者へ伝達する技能を習得する。教科の指導法に関する科目にて教育実践力を養成する。 模擬体験や事例研究、教材試用、指導案作成などのプラクティカルな授業のなかで社会科教育の手法について習熟の度合いを深めていくとともに、これまでに学んだ教育に関する理論と方法を復習し、教員としての資質能力を総合的に向上させる。
4年次	1・2クォーター	教職課程においてすなわち教育実習に赴く時期であり、事前指導にて今までの学習の成果を検証、総括する。 学校現場で生徒たちと交わる実体験を通して、楽しさも難しさも含めた教職の醍醐味を実感する。数週間の実習期間の中で、教員として自分には何が出来て何が出来ないのかを認識し、足りない部分は克服すべき課題として持ち帰り、後半の学習につなげる。
	3・4クォーター	教育実習で得られた社会科教師としての課題を克服するため、事後指導、教職実践演習にて弱点を克服する。 第3クォーターに引き続き、事後指導と教職実践演習による総決算の時期。教員として足りない知識や技術をブラッシュアップし、授業で培った専門的な技能と見識をいかに各教科の教育へリンクさせるかを各自で思案し、4年間で獲得した実践知を生徒に指導できる自らの方法論を確立する。

■メディア表現学部メディア表現学科 認定課程:高一種免(情報)

1) 教員養成の目標

メディア表現学科では技術革新が進む人類社会において、急激に変化し続けるメディアと産業システムの動向をふまえたうえで、豊かな文化の発展に寄与し、時代の先端を切り開くコンテンツ、メディア、新たなビジネスモデルを創造できる人材養成を目的としている。本学科ではこれらの取組にて得た知識を教育現場で伝えるため、メディアと情報(技術)に関する基本的な知識と理解を修得し情報技術を適切に活用することの出来る教員、デザイン思考とアート思考を用い、答えがない課題に対し創造的に取り組み、今後の Society5.0(超スマート社会)に主体的に参画することが出来る教員の育成を目標としている。

2) 目標達成のための計画

履修年次		目標達成のための段階的計画
年次	時期	
1年次	1・2クォーター	「課程」や「履修制度」の仕組みを知り、大学生活の基礎を学ぶ。学生は初年次から開設している入門的位置づけの教職関連科目を履修することで、「教育」についての理解を深めつつ、今後の教職課程履修の有無について判断する材料とする。 教職関連科目を通じて視野を拡張し、今後の学びの可能性を広げ、自らの学習計画の向上と改善を目指す。
	3・4クォーター	入門的位置づけの教職関連科目、66条の6に該当する科目を履修し、1年次での取得を目指す。履修することで理解を深め、今後の教職課程継続について客観的な判断をする時期となる。
2年次	1・2クォーター	教職課程履修に関する覚悟を固める課程登録手続きが発生する年次となる。そのため学科と教職課程の両立に向けての履修計画を立案する。一方で教職の基礎的理解に関する科目取得に本格的に取り組む。 教科に関する科目の基礎的な理解を深めながら、教職課程に関連する科目の単位取得を目指す。
	3・4クォーター	2年次後半の教職の基礎的理解に関する科目を履修し、教員になるための理解を深めつつ、教科に関する科目も集中的に取得する時期となる。 教職課程の科目について学び、教科に関する科目の取りこぼしがないか確認する。
3年次	1・2クォーター	教科教育法にて教育実習における授業運営の基礎を学ぶ。前クォーターに引き続き教科教育法にて教育実習の準備を進める。また教科に関する科目において更に専門知を高める。
	3・4クォーター	3年次後半にて教職の基礎的理解に関する科目の主要な部分の単位取得を目標とする。 模擬体験や事例研究、教材試用、指導案作成などのプラクティカルな授業のなかで情報科教育の手法について習熟の度合いを深めていくとともに、これまでに学んだ教育に関する理論と方法を復習し、教員としての資質能力を総合的に向上させる。
4年次	1・2クォーター	教職課程においてすなわち教育実習に赴く時期であり、事前指導にて今までの学習の成果を検証、総括する。 学校現場で生徒たちと交わる実体験を通して、楽しさも難しさも含めた教職の醍醐味を実感する。数週間の実習期間の中で、教員として自分には何が出来て何が出来ないのかを認識し、足りない部分は克服すべき課題として持ち帰り、後半の学習につなげる。
	3・4クォーター	教育実習で得られた情報科教師としての課題を克服するため、事後指導、教職実践演習にて弱点を克服する。 教員として足りない知識や技術をブラッシュアップし、授業で培った専門的な技能と見識をいかに情報科の教育へリンクさせるかを各自で思料し、4年間で獲得した実践知を生徒に指導できる自らの方法論を確立する。